

ネパールの風

98ネパール日記 その・2

後藤 隆徳

(前号からの続き・一部書替えました)

れた。産業の少ないこの国では仕事がないのだ。

事実、隊のサーダー（シェルパ頭・事実上隊の最高指揮者・ポーターなど全て仕切る）の兄弟で4男のテックは、現在カトマンドゥのカマスト大学で法律と経済を学ぶ4年生だが、卒業しても希望する仕事には就けず、このようなシェルパなど、登山関係の仕事しかないと話していた。彼は日本語、英語が堪能な21歳の好青年。

学資は日本円に換算して年間約100万掛かるが、長兄のサーダーに援助してもらっていると話していた。貧しくも明るく逞しい彼を見るにつけ、ネパールの将来は明るいと思う反面、もしこのままこの有り余る才能を埋没させてしまったらと思うと非常に残念に思った。



バスはカトマンドゥの北の「カカニ」の峠（1860m）に向かう。道路はずっと未舗装でけっして快適な「山岳ドライブ」とは言えない。途中、道路の脇で少年が器に入れた黄色いモロコシみたいなものを差し上げ「いかがですか」という眼差しをバスに投げかける。しかし、バスはそんなことに頓着なくグングンと登っていく。

回りはとにかく見事な段々畑が延々と続く。そこにはジャガイモ、麦などが植えてあった。畑仕事はほとんど女性だった。この国は今だ「男尊女卑」の風潮が強く「女は人間（男）と家畜の間に位置する働くための動物」と言われるぐらい女性の地位は低い。

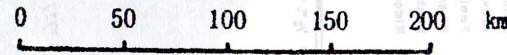
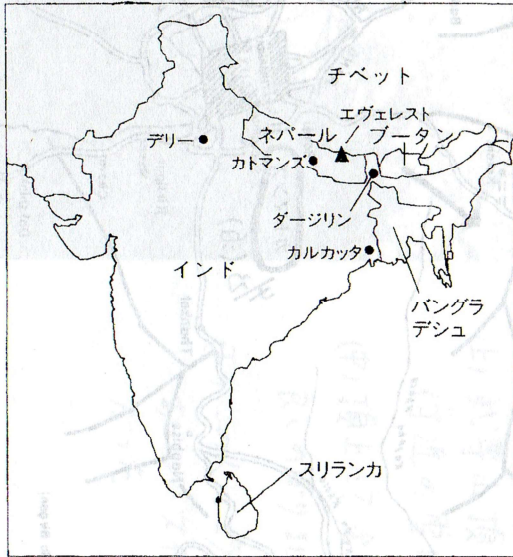
村の娘は大体14、5で結婚するが、良い娘とは「教養の有無でなく、ズバリ健康で働き者であること」という。従って、ネパールは世界でも珍しく、女性の方が平均寿命が短い国でもある。

彼女等は民族衣装の「サリー」に似たスカートをまとい、ズルズルと引きずって畑仕事を続ける。山間部の水の少ないこの地で、洗濯はどうするのかと考えてしまう。

実は「洗濯」はほとんどやられていないようだ。洗濯物はごく稀に民家の庭先に干されているだけだった。

同時に「入浴」も同じことがいえる。お風呂の習慣はなく、タライにお湯を入れて行水

ネパール
ヒマラヤ概念図



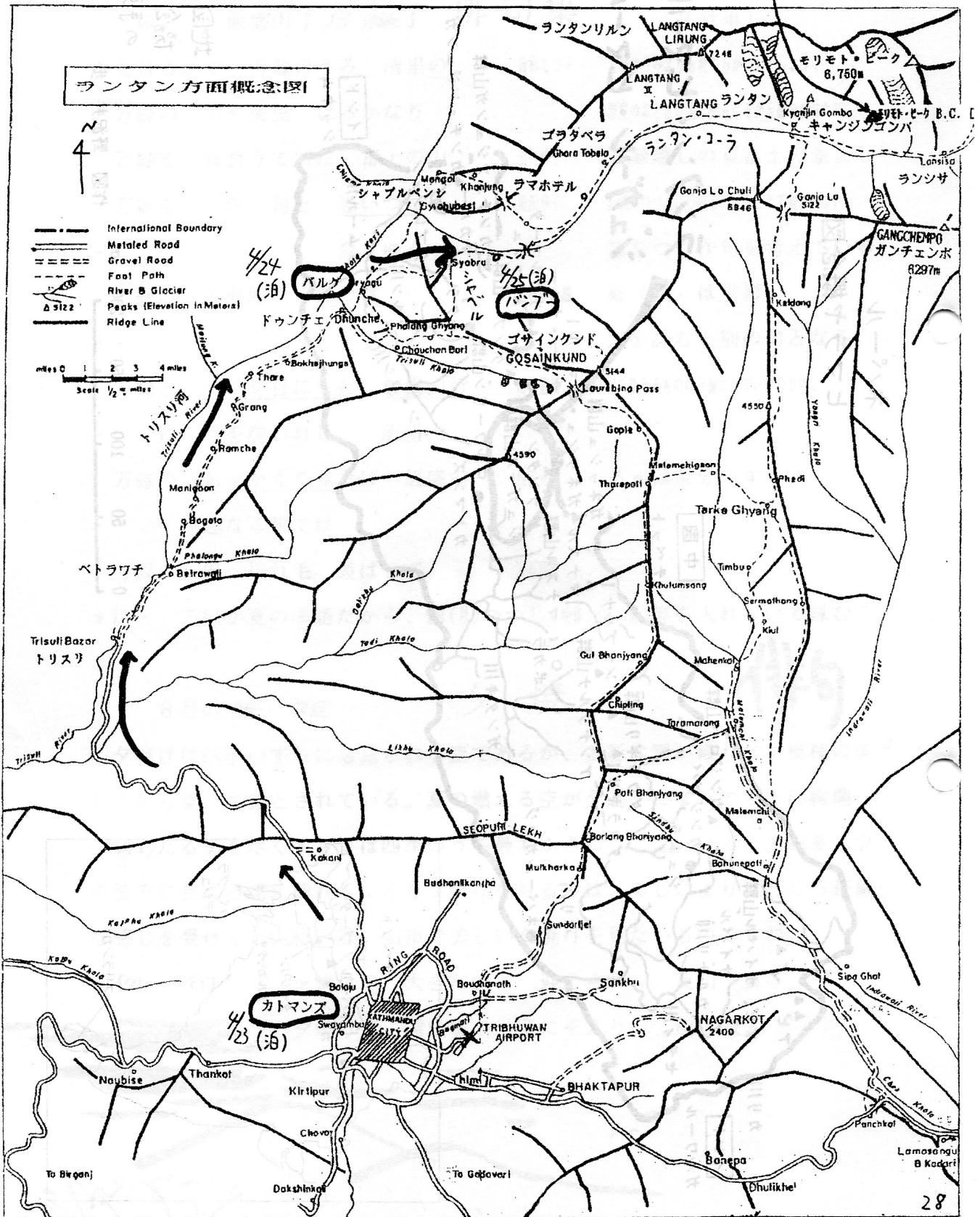
作図 野沢井 歩

地図は日本ヒマラヤ
協会「ネパール登山
の手引」から転載

カトマンズ～ランタン方面概念図

ヤラピークこれです。

ランタン方面概念図



するのが「ヌハウヌ（入浴する）」という言葉の意味のようだ。従って現地の人々、シェルパ、ポーターは近づくと「猛烈な臭気」が漂う。風邪で熱を出したときはこの匂いで頭がクラクラした。

ただ、この体の汚れについては、高所の村々においては極度の乾燥と強い紫外線から皮膚を守るための生活の知恵という部分もあるようであるが・・・。

しかし、無理もない。例えば水があっても、ネパールは「燃料」が絶対的にない。燃料の多くは山の樹木に頼っているのが現状だ。従って丸坊主の山も多く、貴重なシャクナゲも切られていた。このためネパールの森林は年間約3%消滅しているという。



「カカニ」の峠の街に入る。この街の入り口にはチェック・ポストがある。バルクまでの道のりにチェック・ポストは計5ヶ所あるがトレッカーはトレッキング・パーミット（入域許可）が必要になる。

ネパールでは旅行者が立ち入れる場所は制限されていて、自由に歩くことができるのはカトマンドゥ盆地、ポカラ、南部の諸都市やハイウェイ沿いの街、そしてチトワン国立公園などに限定されている。だから、それ以外の山地に入るためにはトレッキング・パーミットが必要になる。もちろん、場所、期間などで条件、料金も変わってくる。

さらに、国立公園ゲートでエントリー・パーミット（入園料領収書）と所持品（主にビデオカメラ）のチェックを受ける。ビデオカメラは違反すると10万円徴収されるとのこと。持参した参加者の1人は屋根の上の荷物に隠した。

バスを止めトイレ休憩をする。雨でぬかるんだグチャグチャのメインストリート？に泥まみれの小ブタが数頭ウロウロしている。

左右には雑貨屋、穀物屋、果物屋、仕立屋、飲料店が並び、一応日常生活に必要な物は揃っていた。例によつて男、女達、子どもが暇そうに、かつ、外来者に興味深々という感じで、たむろしていた。

ここで、女性は店舗のトイレを借りた。私も覗いてみたが、電灯はなく暗く、いわゆる「ボットン便所」で紙はなかった。

ここの飲料店で2RPのミルクティーを飲んだ。ぬるくてお世辞にも「うまい」とは言えなかったが女主人は喜んでくれた。しかし、この頃から私の腹は「バー、ビー、ブー、ベー、ポー」と何となく怪しくなってきた。その後もアタック前日まで下痢は続いたが、帰国後、高岡のお客さんでヒマラヤ通の話では、下痢防止策として「うがい薬のイソジンガーグル」と「ストロー」を持参するそうである。

イソジンは食べ物、飲み物の中に2～3滴落とし消毒し、飲み物は食器に口を付けずストローで飲むそうだ。

確かに水が不自由な山中においては、食器など汚い水でサッと流すだけである。取り扱うシェルパの手も決して清潔とは言い難い。目撃はしていないが、トイレットペーパー（



高ぶる貴族の階
 なるまをきりよけれ
 月夜心か。ゆきか
 け、おつるさこ
 金たまきまの涙
 美しきつた
 る。始めは急な下り
 る水ここおスハ
 なる。気高いの道に
 合！ス！つ！
 時には見えが
 け。る！つ！き



(上) トリスル・ハザール
 付近の水田で
 働く女性
 (中) 子守をする少年
 (下) 途中の部落の
 若い母親(中
 央左向)

紙)が貴重で高価なこの国では、トイレの扱いは左手で処理するとのこと。

もしそうなら、日本の「超清潔」な世界に馴染んだ体には、あまりにも「過酷」かもしれない。いずれにしろ、我々は雑菌に対する「耐性」が低い。

こちらでは、もう日本では稀になったコレラ、肝炎、マラリア、腸チフス、結核などの病気がまだまだ多いという。



バスはここから標高534mのトリスリ・バザールに下る。道は雨でぬかるみグジャグジャでバス1台がやっと通れる広さである。時々、屋根の上まで「人間」を満載したバスが登ってくる。皆でワイワイガヤガヤ、ようやくバスはすれ違う。えらい騒ぎである。

所々、道路の側溝の工事をしていた。工事といっても機械は使われず全て手作業だ。まったくノンビリしたものでスコップで土を取り除くのに、一人がスコップを持ち、一人はスコップの柄に縄を縛り、こちらでスコップの動きに合わせて引っ張るのだ。一人でやる「日本式」のがはるかに効率的と思うのだが・・・。

下りきるとTadi Kholi (正確な読みが不明なので現地表記します)が流れ、対岸には豊かな水田が青々としていた。この辺りは亜熱帯の雰囲気です。山にはバナナが沢山実っていた。

チェック・ポストをパスしてしばらく走るとこの辺りでは大きな街のBaishiに着く。街には大きな菩提樹が茂り、明るく乾燥した空気が流れていた。往来する人もござっぱりした恰好で、どこか豊かで余裕が感じられた。

食堂のテラスのテーブルに座り昼食を摂った。春の陽射しが暖かく心地よかった。ビールを飲む。食事は美味しかった。

裏に回りトイレを借りると、子供が我々の食べた食器を少し濁った水で洗っていた。草に粘土をつけ擦っていた。トイレが近くでちょっと不衛生である。

バスは発電所を見てPhalung Kholiを渡り、再び猛烈な山道をたどる。大体、現在使っているネパールの道路は本来軍事用のものだった。それを観光用に転用しているわけだから、ちょっと無理があるにはある。もっとも、この車道が出来る前はトリスリ・バザールからダウンチェまで3日のキャラバンを要したというから、それを思えば我慢である。

対岸の山はすでに3900mもある。眼もくらむ高さの断崖を行く。この辺りには、もうネパールの国花のラリグラス(真っ赤なシャクナゲ)が咲き、遙か下にトリスリ川が流れていた。

またチェック・ポストがある。銃を構えた兵士が立ち、写真は撮らせない。しばらく走ると、今度は銃を持った兵士が4~5人バスを止め、ドヤドヤと乗り込んできた。そんな経験は日本では無いので一瞬緊張が走る。昇降口の一番近い所に座っていた私は「この銃の安全装置は大丈夫だろうな」なんて考えてしまった。



(上) Baimshiの街
 明るい雰囲気
 だった
 (中) 食器を洗う
 少年 すぐ右
 がトイレ
 (下) 1/4バルクの
 テント場

それにしても、その兵士達の「臭いこと臭いこと」。シェルパの比ではなかった。鼻が「曲がる」でなく「壊れそう」だった。

ドゥンチェ（2040m）入り口にまたチェック・ポスト。ここが今までで一番厳しく手荷物をテーブルに乗せチェックする。ポストの真ん中の広場に立派な恰好をした兵士が立ち、全体を仕切っていた。でも、あまり偉ぶったところはなく、どちらかと言えば「愛嬌」のある方だった。一枚写真をとったが「ノー、ノー」と笑顔で断られた。先程の「臭い臭い」兵隊さんもここで下車。「ナマステ、ナマステ（ありがとう、ありがとう）」を連発しニコニコしながら兵舎に向かって行った。

通過に時間が掛かるので「静岡組」（後に清水の次郎長一家とあだ名された）は歩いて先行する。今日はずっとバスだったので、歩いたら気分がスッキリ。路傍には太くて立派なワラビが沢山あって大騒ぎだった。

程なく今日の宿バルクに到着。段々畑の一角にすでにテントは張られていた。ここで参加者は、A隊・後藤（真理）ほか9名、B隊・志小田ほか10名に二分され以後、実質的に別行動となる。

夕食までテン場の裏山を散歩する。段々畑にはジャガイモが植えてあった。松の木があり日本にはない大きな松ボックリがゴロゴロしていた。余りに立派で美しいのでザックの中に2ヶ忍ばせた。これは現在我が家のテレビの上に鎮座している。

夕食時、食堂のテントに全員集合し、あらためてB隊の自己紹介をする。

ヒマラヤ・トレッキング豊富でネパール語（シェルパ語）・英語堪能でやや酒乱気味の退職教師の奈良のタケモトさん、福岡で居酒屋経営している色白で、昔は相当男を泣かせたようなママのアリトミさん、前述のアコンカグア3回アタック者で海外登山のため日本にほとんどいない？と豪語する萩市のスエマツさん、加藤が言う「物凄い太股をしたサングラスが怪しげで、いつも口の回りに陽焼止めクリームを塗った、最後に笑うと公言したガニ股」の西宮のフナキさん。

日本の冬山に一度も登っていない顔色の悪い高年女性の神奈川のキタジマさん、地味で厚手のメガネを掛けた宇部市のニシムラさん、そして、自ら「バツイチ」を公表し、ちょっと「チック」があるツアー・リーダーのシコダさん、そして我々4人の4男、7女だった。

まあ、精鋭が揃ったA隊に比べB隊らしく？実に多彩・多才、かつ「アブナイ」不揃いのリング達だった（こちらのリングは本当に不揃いで小さい）。

第3日目 4月25日（土）晴 バルク（推定高度1850m）7：20～バンブ
－（2230）15：50

みくりやの人・顔

裾野麗峰ハイパインクラブ会員

高岡 八千代さん

「冬の甲斐駒ヶ岳(標高二、九六六m)。アイゼンとピッケルで緊張して何時間も登る。その時の緊張感がいいですね!」
還暦を迎えた高岡さんだけれど、登山を始めて三年半。一年間を通して週末の大半はどこかの山で過ごす。いま、中北駿

で一番元気な女性かも知れない。

先月初めはネパールヒマラヤのヤラ・ピーク(標高五、五〇〇m)に登頂した。初めての海外遠征だ。裾野麗峰ハイパインクラブの会員として仲間とともに加わった結成五周年記念登山だった。

佐賀県藤津郡太良町出身。昭和三十四年ごろ、姉を頼って小山市須走へ。

んがいる。自宅では直さんと療術治療所を営む。山に引かれるのは?と



自衛官だった直さんと結婚し、娘さん二人の母親に。いまは四人のお孫さ

尋ねる。「例えば凍結した冬山登山。長い時間、緊張して登りますね。足

踏みはずしたら……」「この緊迫した空気の中、山頂にたどり着く大きな満足感。感激はひとしおです」と。女性らしい語り口調の中に慎重さや力強さがこちらに伝わる。冬山のこの感激は、最近、剣岳(富山・標高二、九八八m)で実感した。高岡さんは冬山は無論年中、中部山岳の山へ出かける。登山を始めた平成六年十一月以前は、肩など体のあちこちが痛んだ。しかし、今はうそのように何ともないという。ヒマラヤ・ヤラピークでは、ネパール人から気

軽に夕食に招かれるなど心の温かさにも触れた。ひと昔、日本でも珍しくなかったやさしいぬくもり。新しい発見だった。シャクナゲも鮮やかだった。太さ四、五十cmの高木がちょうど開花期だった。標高が上がるにつれ花の色が真赤からピンクへ。そして純白に変わる。「外国の山へ行けるとは思いませんでした。よかったですね。また行きたいです」とも。この週末は山梨県内の山に挑む。御殿場市杉名沢二二八の五。

バンブーに高岡の孫が現れる！？

静かな朝だった。カッコウの声で目が覚めた。やや雲が多かったが、北東の方角に大きな雪山が見え朝日に染まっていた。聞くと盟主ランタン・リルン（7225m）西のランタンII峰（Langtang II・6571m）とのこと。

キッチン・ボーイがテントに洗顔用のお湯とモーニングティーを届けてくれた。こういうサービスはシェルパ（族）が存在し登山を支援する制度が確立しているネパールならのも（ちなみにカラコルム、ブータンなど同じヒマラヤ登山でもシェルパがいない地域では全て自分達で荷揚げ等行わなければならない）だ。

従って多くの困難を伴うエベレストにせよマナスルにせよ荷揚げ、ルート工作、料理などシェルパの存在なしでは登山は成り立たないのである。（つづく）



4/25 バルクでの朝食風景